

# 「参加する」教養主義のメディア

-雑誌『労働北九州』『緑と太陽』を事例として-

筑波大学大学院 野上 亮

## 1. 目的

本報告の目的は、佐木隆三らが刊行したサークル雑誌『労働北九州』及び『緑と太陽』を事例として、サークル運動が下火になる 1960 年代半ば以降に、なぜ彼らの取り組みが支持を広げたのか、雑誌のメディアとしての機能に着目しながら考察することにある。

## 2. 方法

これまでのサークル雑誌研究は、蓄積は多いものの、そのほとんどが、思想史的考察にとどまっている。ここでは、「総じて「インテリとは異質な大衆」が前提視されており、知的なものへの憧憬を抱えた人々の鬱屈や葛藤に関心が払われているわけではない（福間 2017 : 332）」現状がある。そうした現状を踏まえ、本報告は、福間（2017）と同じく、メディア史のアプローチをとる。また、調査方法は、当該雑誌記事や「読者のページ」欄等の内容分析である。

## 3. 結果

労働者を中心とした「底辺の抵抗と記録」を志した『労働北九州』は、総合雑誌という体裁をとった。そこでは、政治と文学の関係が論じられ、労働者を中心とした連帯の可能性が模索された。内容としては、鉄鋼労働者に関するルポルタージュや論文、小説が主であった。サークル運動関係者や労働者作家たちも、この雑誌をサークル運動の一環ととらえ、その方向で評価を下していた。しかし、読者は、彼らの思惑とは異なった反応を見せた。彼らが対象としていたはずのブルーカラー労働者には、「程度が高くて難しい」と評価される一方、書店で購入したと思われる主婦層から、「面白い」「私も書きたい、仲間になりたい」という要望が寄せられた。さらに、「誌名が泥臭い」との評価の一方で、「泥臭さとスマートさ」が同居しているとの声も寄せられた。結果として、彼らがメディアイベントとして主催する文学学校等にも主婦が来校し、当初の目論見とは異なった形で展開を遂げた。

上記のことを踏まえ、考察を展開すると、『労働北九州』『緑と太陽』は、読者に「背伸び」と「参加」の感覚を与えるメディアとして機能したと言える。一つは、知的営みへの「背伸び」と「参加」、もう一つは、社会変革への「参加」である。彼らがターゲットとしていた労働者層には「背伸び」の感覚しか与えられない側面もあったが、主婦層には「背伸び」と「参加」の感覚を与えられた。従来のサークル雑誌には、「背伸び」の側面がなく、中央の総合雑誌には「参加」の側面が欠如していた。『労働北九州』『緑と太陽』は、この両方の感覚を読者に与えることに成功したと言える。

## 4. 結論

結論から言えば、『労働北九州』『緑と太陽』は、「参加する」教養主義のメディアであったといえる。知的営みと社会変革への参加の感覚を、労働者よりもむしろ主婦層が受けたというのは、宛先違いではあったとはいえ、佐木らの運動はある面では成功を収めたのではないかと考えられる。

文献

福間良明, 2017, 『「働く青年」と教養の戦後史：人生雑誌と読者のゆくえ』, 筑摩書房 他